

第三十四 方言及隱語

日 黒 和 三 郎

同じく亞細亞人にて、支那と日本とは、言語を異にせり、同じく日本人にして、西陲東邊其處を異にするに従ひて、多少言語に差違を生ぜり、處を異にすれば、言語にも差異あるは、自然の勢にて、風土山川、遺傳經歷等の差異は、おのづから人々の音調にも、特異なる現象を示すなるべく、音調の特異なるは、おのづから言語を組織すべき發音の方法にまで影響を及ぼすなるべくし繁華なる土地は、諸種の交際も頻繁なれば、

處を異にせる人々も集合し、自然言語も融化萬通し易けれども、言語に隆衰消長あり、寒僻なる土地は、處を異にせる人々の交通甚稀なれば、言語の融化萬通を缺ける代りに、隆衰消長も亦稀なり、世に論者ありていへらく、處を異にするに従ひて、言語を異にせるは、甚不都合なり、一國の教育を始として、他萬般の小事に至るまで、これが普通洽流を圖らむとするには、一國若くは全國の言語を一定せざるべからず、この國語の一定せざるは、即文明を壅塞するものなり、苟文明の全進を謀らば、國語の一定を企てざるべからずと、又一の論者あり、否とよ、言語は、其の地方／＼の手形なりとは、俚諺にもいふことなり、之を大にして考ふれば、英吉利には英吉利の言語あり、佛蘭西には、佛蘭西の言語あり、獨逸にも露西亞にも、伊太利にも支那にも日本にも、又皆各その國々の言語ありて、この各異なる言語こそ、その國々の異なる所を代表するものにて、これ所謂、その國々の手形なりけれ、然るをもしこの手形をして、各融化混一せしめば、或は萬般普通の便利はあらん、然れども、これその國をも融化混一せしむるものにして、必竟その國の亡滅を招く原因なり、これと同じく、一國の内にて、その地方地方の方言を、均一普通のものとなせんとするは、謂なき事なりと、今

この二の論は各一利あらん、おのれそのよしやあしやの判別を下さむとは非ねども、方言といへば、卑俚の如くおもへる人ありて、都人は之を卑しめて田舎詞といへり、されど言語の本質によりて考ふる時は、田舎詞の中には、却りて雅なるあり、言語の事に専門にかゝづらはむ人は、この方言も、大に研究の好材料たり、故におのが見聞に留れるものを拾ひ集めて、左に掲げんとす、もしそれさきの二の論の如きは、おのがこゝに方言を拾集するに、一も關する所なし、見む人この意を得てよ、

方言は、わが國には、古より物に見えたるもの少からず、萬葉集古今集にも、東歌ありて、總て方言を以て詠出したるもの、みには非ざれども、又徴すべきものなきに非ず、又上世には、朝廷にて大嘗會の如き儀式には、風俗歌、稻舂歌等、皆その土地々々より徴せられしかば、今に至るまで、方言として見るべきものあり、其の他紀行文などにもまゝ存するあれど、方言として諸國のを集めたるものは、未曾てなかりき、下りて彼の俳諧師を以て聞えたる越谷五山の物類稱呼こそ、諸國のことあまた載せて、最も委しきものならめ、おのれは、今これ等のものより取らずして、他の漫散なる隨筆類の中に散見せるもの、及び傳聞に係るもの、又は實際に聞き及べるものを取り

集めて、左に掲ぐべし、

古來方言のみを以て綴りなせる歌謠、或は一束ヒトツカネに呼び易くしたるもの、又は方言を和歌俳句の如きもの、内に加へて、一縷を博したるものあり、今便宜の爲に、これ等のものより揭示すべし、陸中國花卷驛の捨躍の歌謠なりといへるものあり、語意難澁解すべからざれども、僻陬の方言として實に珍らしきものなり、

ちーごーぶの、てへつから、星のおちが、づばぬけて、火事のたまごをぐはちやり、ふんぐはした、

右「ちーごーぶ」は、地瘤の義にして、山を謂ひ、てへつは、天邊にて、山の頂なり、此は今にも關東邊にていふ詞にて、てっぺんといへり、「星のおやち」は、月の隱語、「火事のたまご」は、提燈の隱語なり、づばぬけは、高く抜け出づる事、ぐはちやりふんぐはしたは、鏑然踏破るをいへり、一首の意、月山上に出で、恰晝の如し、よりて携へ來れる燈を踏破せりといふなり、この歌、彼の關原の戰に際して、伊達氏稗貫氏和賀氏を嗾して、花卷城主松齊を攻めししが勝たず、松齊敵兵を追ひて境上に至り、還るに及びて、この謠を以て凱歌に代へたりといふ、鹿兒嶋の俗謠に、

肥後の加藤が、おちやるなら、餓硝着に團子まうそ。夫でもきかすにおちやるなら、首に刀の引出物、

最早おちやるか、御江戸へおちやる、弓もつよかれ矢も利かれ

初のは即頼山陽の彈丸硝藥是膳羞の詩に入りたるものにて、誰知らぬ者なけれど、「おちやる」といへるは彼の地の方言なり、又まうそといへるも方言ながら、此等は實に卑しからぬ方言といふべし（以上洋々社談による）

安政年中、幕下の士久須美祐雋といへる者、大坂の町奉行となり、彼の地の方言を以て綴れる狂歌あり、

此程のゑらい暑さのしんどさにおへさん達もこけて居るなり

順繰にこけては休むそのねきに御寮人にはえらい身仕舞

どだいこの暑さにまけて何せうもよう出来ぬなり心氣くさくて

右〇點を施せる、皆方言にして、此は今日にても、彼の地の方言として、專いへること也、ゑらいは關東邊にて極ひどいといへるに當り、しんどは疲倦なり、おへさんは關東にてお上さん、御新造様といへるに當り、こけは寝ることなり、ねきは傍の事、御寮

人は嫁御寮の事、身仕舞は化粧する事、どだいとはもとよりといへる心何せうもは何をなさんとなり、心氣くさは、これ亦江戸關東にかけての面倒くさい、又はぢれつたいといへるに當れり、又食物などの賣聲などは今も、東京など、は大に異なる由、ほつこりしんまいも、うまいこつちや

ほつこりは暖なることにて、しんまいもは新出来なり、こつちやは事であるといへる意にて、うまい事ぞとなり、かゝる方言は猶あまたあるべけれど、大坂などの、今も人々のよく言ふことなれば、多くは取りいせず（以上浪華の風による）

又大和の國の方言をすべいへる諺、

ていゝこざれ、さうはつちや、かたつかけんずる、ゑそまつり、

此等は悉く方言にて、ていゝこざれは、歩行してござれの義なるべく、さうはつちやは只左様といへることにて、はつちやは語尾につける助語なるべし、かたつかは、つまらぬといへる詞と同じく、かたつかもないなど、もいへる由、けんずるは、字音間炊にて、朝夕の間に炊ぐ俗にいふ晝飯のことなり、ゑそまつりは、ゑそは魚名にて、大和は四面皆山の國なれば、魚類は絶えてなく、神事祭禮などにも、魚類を得るは至

りて難き事なれば、珍肴をそなへたる饗宴の時などにいへる詞なりとか、

因にいふ、我が國戰國時代以前は、朝夕のみ只二食なりしを、今日の如く三食になりたること故今の晝食の事は所により人により、大に稱呼を異にせり、侍武士は中食といひ、町人は晝食といひ、間炊又は點心といへることは、僧侶よりいでし詞なるべし、又徳川時代にて道中の旅籠屋にては、ひる息といひ、御所方の婦人は御供御と稱せりとか、又農人などの勤隨或は硯水といへるは、皆間炊の假借なるべし、

出羽地方の方言をいへる諺に、

あいべちや、こいちや、ござもせちや、

あいべは、歩めの轉訛、こいは來れ、ござもせは、さあござれといへる程の意なり、ちやといへるは、凡て語の下には、大方つけていへる助語なり、この語の末に、助語をおくことは、何國にても大方あることにて、ちやといへるは、北越なども大方然りとす、關東邊にては、さといへる助語を用うること多し、宜いさ、行くさの類、又九州などには、ばつてんといへる助語を用う、但こは何々すればと、ば辭にて受くる詞に限れる如

く思はる、

盛岡あたりの方言の諺に、

びる、ばち、どんぼがに、げいる、

右は蛭、蜂、蜻蛉蟹墓なり、彼の國には、土俗の言、大方濁音にかはること、此の外にも猶多きことなり、これにつきて、東國常陸等の海岸に沿へる所は、多くジの濁音はズの濁音に變り、又多くの詞鼻頭に觸れて、出づるもの多し、九州熊本又は鹿兒島地方の人は、ロ音を發すること能はずして、多くドの濁音に變せり、此等諸國につきて、仔細に取調べたらんには、猶多きことなるべし、

方言にても、全く正しき雅言より轉訛せるもの甚多し、今左に一二を擧げて、方言を田舎詞として、卑俗のものに心得、そを擯斥するものどもの耳朶を驚かさむ、

べい

したつけ

いつたつけ

たまげる

ぎやある

おもしやる

あんだ

けゝる

べいは、關東の特有として、世に名高き詞にはあれど、こは可^{ベシベキ}可^{ベシベキ}の詞のきし。い。皆横韻相通にて、答むべきにも非ず、古書などにも見えたる詞なり、但所によりてはべいと

半濁音に云ひなして平聲より上聲にかはることありしたつけ、いつたつけは、したりき、いひたりきを、急促に云ひなす轉訛にして、その本はおのゝ雅言なり、たまげるは驚愕せる時の形容詞にて、魂消の俗活なり、雪消などの詞と、もとは同じ、こを都人の膽をつぶすといふに比せば、その雅俗人を待たずして判然たるべし、ぎやあるといへるは、御意あるといへる詞、おもしやるは、お申しあるなるべし、何れも俗なる詞にあらず、又俗におしやるといへる詞あり、此はおもしやるの略詞か、或はお仰せあるの約なるか、判然せざれど、これとても卑しき詞には非るべし、あんだといへるは何だの横韻相通け、るといへるは、物を高き所におくことにいへば、掲げるの略轉か、何れも卑俗の詞には聞えぬなり、又物を猥りならざる様に、取り收むることにしんまうといへる國人あり、こは慎莫の字音にて、慎みて何々すること莫れと云ふ意なるべし、北國にて、これと同じ意に物をしまつすることを、あんどよするといふことをいへり、之も恐くは、安置の字音には非るか、こは試みにいへるのみ、

江戸にて、盜賊のことを、どろぼうといひ、大坂にてどろぼうといへるは、放蕩者の事をいへり、一の詞にして、義異なり、然れども、よく語源を原ぬる時は、自その間に差別

あるなり、江戸のどろぼうは、取坊の轉にて、坊は賤しめていひおとす時に用うる詞、けちん坊、黒坊、癪坊等の如きなり、大坂のどろぼうは、どらといへる詞の轉にて、どらは又墮落の訛言なり、かくの如く、同じ詞にても、用ゐる所異なりて、大なる差異を生ずることあれば、方言とて、猥りにすべからざることなり、又俗に、ひがいすといひて、瘡せたる人の上にも用ゐる來れり、こは鯊魚の類にて、形瘡せ骨高き魚ありて、その名より瘡人の上にも用うるなりといへば、その語原を究めて、おもひもよらぬ方言多かるべし、(以上世事百談とおのが見聞とをとりまぜていへり)

松平樂翁侯の關の秋風に、白川城にありける條に、下部の女豆をかはんとて、下部男をよびて、その由いひしかば、なじやだ豆だむしといひぬ、女豆の名なるべしと思ひけむ、其なじやだ豆に侍るといひければ、男いとうたがひたるさまして、又いひぬ、傍に此國の事をおぼえたるがうちき、て、わらひつゝ、なにの豆にて候かと問ふことに候といひければ、互にはらわたをきりたりとぞ、なじよとは、何條といふことなるべし、むしとはこの國にて、言葉のすゑにつくる事あり、いつか田舎の童の田面にいたるに、何なすかととひしかば、はいねにたむしとこたへきとあり、このむしは上

の詞勢によりて、自然に撥ぬる音にかはる例のことにて、しは雅言の助字と均しかるべきか、今も福島邊にては語の末に、しといへるを添ふ、左様だし、如此様だしなど、普通の事なり、又青森地方の方言になりては、他所のものには、その何の事をいへるにか、全然わいためがたきこと多かり、かゝる事にても、その語原を究めなば、自知られ得べきものか、今「言語」といへる雜誌に載せたるもの一二を、左に掲げて、大方の言語學専門の人々に質す、別に一段下けて書けるものは、その譯語なり、

アノ、シアー。オメダノ、シアー。アバヨ。シガアニハヤク、ママ、クテ、シマレテ、ヘテライ。
 アノ、チー。オマヘノ、チー。オッカサンガ。オマヘニ。ハヤク、ゴゼンヲ、タベテ。オシマイッテ。イッテイタヨ。

オ、エ。ソダエ。シガアノ、アンチオコ、ア。ドシタ、バエ、ビキアマダ、イキテラ、ナ。ワアサア。ヘテラテ。ヘテキアサア。
 エ。

アア、ソーダ。オマヘノ、アニサンハ。ドオシタエ。アカンボハ、マダイキテイルカ、エ。ワタシガソォーイッテイタト、ソライッテ、クダサイ。

その他、諸國の方言の著明なるものを挙げれば、限りもあらざるべし、又遊所の花街

等には、各その社會に適用すべきものありて、(こは隱語の方なるべし)種々異様なるもの多けれど、悉く省きつ、只琉球と蝦夷との端と端との方言を徴すべきもの、一二を舉げて止みなん、

念佛上人ユホウンシンハイナ(粉引歌と譯す)

タハアンウタレ是や人々	エハカシユカス教を聞よ
トナシモイシカ早い遅いか	アリシユイライナ一度は死ぬぞ
ライホコハナキ死ぬがいやなら	子ンブツキカン念佛申せ
キクルオヘキ子申す人なら	センハラヤソカいつ何時に
ウ、セ子トハチ假のからだの	ライハ子ヤツカ死たるとても
ヤアキセイヘシ蟬のわけがら	オシヨウコヲ捨るが如く
ヂコブアフレハ月も日も	シヨモライコタレ死せざる國へ
オマツセカトハ往て生れて	ヤエラムアニ子心のまゝに
エマチホ、タレ妻や小供が	オマツフハ子チキが愛そならば
ウドラ子ンフツ共に念佛	キイチキヒリカ申すがよいぞ

タレムシリカタ此世は必

ムシリホツハユ後世は分

シチツフユフイナ一ツ蓮の

オボシノヌヤツ子永く樂み

シヨモヤイホムシユ災難受けす。

アララムトクテ淨土に生れ

カシケタオハ、ハ臺に乗て

シヨモライル子、死ぬ事そなし

右は辨瑞上人、夷地に住める時、夷語を以て粉引歌を作り、土人を教化せしものなりとぞ。(菟園小説)右の中に、前に出だせる月のことを同じくちこぶといへり、されば隠語にあらで、東北の邊陲より、蝦夷地にかけて、專方言としていへることなるか、さてもこの蝦夷地といへるは、今の北海道の事にはあらざるかもしれず、純粹の北海道の土人の言語は、

ヤエ、シヤマニ、ナークコロ、エボ、ゲー、シカルント、カタ、ツラ、フユフ、タバ、ン、ツーラ、テシカラ、オツタ、クコレ、

あ、なんと、せう、わが、をつと、ひに、こがれて、大空を、見渡す雲の、たなびくよ、此雲にそこに、一言、頼みたい

右は、かゝを弾く時の歌といへり、かゝとは樂器なるべし、又くりかへし歌ふ歌とて、

ホンフフンカムイ アシベ、ヘヌエくく

鮭の魚の、浮つ、沈みつ

こは猶ありつれど、その内を略舉せるなり。(十九年八月東京日々新聞)

次に琉球の方言を徴すべきものを舉げん、

きよのほこらじやな、おれがなたてろ、つぼでをるはなのつゆけたごと

右は何の意たること辨へがたし、彼の國の言語を知れる人に問はまほし、但おれがなたてろは、已が名立てよか、つぼでは、苔みて、はなは花、つゆは露なるべし、右祝儀の時に、彼の三絃に合せて歌ふものなりといへり、酒宴中に謠へるものは、ときはなるまつのかはるもなき、まいつもすこりはいるぞまさる、

上句は、常磐なる松の變色もなきなるべし、下句未判

むかしうらめたるん、あかつきのとりん、今としにならすゑらなあなや

上句、昔怨みたるべし、曉の雞か、下句又未詳

其他にも猶多し。(世説)何れも全篇の意判然せず、琉球には、朝鮮支那の言語は勿論、わが本國の言語も混じれば、委しく研究せんには、言語學上發明する所も多かりぬべ

し、次に少しく隱語の事をのべん、我が國には古より隱語といへるもの、ありしやなしや、延喜式に、忌詞とて、佛を中子經を染紙塔を阿良々岐寺を瓦葺僧を髮長尼を女髮長死を奈保留病を夜須美など、其他猶載せられたるが始めにて、それ等より思ひつきて、民間などに、一種の隱語を作り出でけるか、又唐土の市語などより來れるか、そはとまれかくまれ、隱語は、おほく下等社會に行はれたることは事實なるが如し、その古くものに見えたるは、臥雲日件録ならんか、足利氏の世將軍義政の時、政法漸弛みて、失政多く、加ふるに、義政奢侈を事とし、賦歛益厚く、下民大に苦みしかば、その餘弊、盜賊四方に起り、寶徳享徳の際に至りて、最も甚しき、京師の如き、白晝橫行して、市塵を劫掠せりといへり、此時の事を、日件録に記して、盜賊中有隱語曰止湯曰合沫曰錢湯錢湯者不論貴賤各領所盜曰合沫者賊等分其財曰止湯者不論多少所盜歸賊中首也とあり、此等の諸隱語、各その當時にありては、或は判明せるものもありつらんが、今日にては、多くその何の意より起こりしか詳ならず、而して隱語の由來性質を考ふるに、或る事物を人にそれと知らしむることを厭ひ、又はこれを憚るより生ぜし事と思はるゝなり、故に下等

社會に多く行はれ就中營業利益を主とせる工商家などに行はるゝなり、今左に二三を擧げて、その一斑を知らしむべし、

ふる板ませ

こは家根職のいへることにて、熱き飯と冷かなる飯とを交ぜたることをいへ

り、

雪に千鳥

こは縫はく屋にて、から汁にむきみを入れたるをいへり、

これ等の如きは、各自の縁ある事を以て、隱語とせしにて、素より一般に通すべきにはあらず、然れども、又一般にも通用して言へることあり、そは豆腐のきらずを卯の花などいへる是なり、これ等はきらずといへる名を厭ひて、そを美しくいひなしたるもの也、僧徒の酒を般若湯といひ、魚を水梭花といひ、雞を鑽雞菜といひ、又同じく酒の事を唐茶といひ、蛸を千手觀音とも、天蓋とも、妓童カクマの事を善童子などいへる、皆酒色肉食を禁戒として、他にそれと聞かすることを厭ひ、おのれの方にちなめる語を取りて、隱語とせるなり、甚しきは、衣服のなきものを、誕生佛とさへいへりとか、甲

州身延山の僧徒の隠語に、女のことを花といへりとかある時一寺の門前を、女の通りけるを、僧の見て、よき花の通るはといへば、一人の僧、たてぬかといふ、一人また答へて、花瓶がなしといひけるとかや、花瓶とは金のことにて、金なくては、心のまゝならずといへる意なりといへり、又盜賊の隠語なりとて、土藏の事を娘といひ、犬の事を姑といへりとぞ、例へば、一人の盜某の所によりき娘あり、見たりやといへば、一人の賊答へて、おのれそれを知れる故に、ゆきて見むと欲したれば、まうとめのやかましういひければといへるたぐひなりといへり、これに就きて思ひ合することあり、土俗に處女を稱して、箱入といへるは、或はこれ等土藏といへる隠語などより來りしか、さなくも一の隠語なるべし、以上菟園小説に於て見聞をまじゆ

又近頃桂林漫錄といへるものを見るに、左の文を載せたり、

往年薩州の人の隠語にて、豁拳を打つを見たりしが、一をタンソコ、三をヨコガハ、七を毛ノ尻、九を丸マラズなどと云ひたるを、興あることゝのみ聞き過し、が此頃堅瓠集に、委巷叢談の市語を載せしを見て、始めて唐山の市語なる事を知る、杭人三百六十行、各有市語、中略不若吾鄉市語有文理也、一爲旦底、二爲斷工、三爲横川、四

爲側目、五爲齷丑、六爲撒大、七爲毛根、一作皂脚八爲入開、九爲未丸、十爲田心、全く是より出でたるなり、東都の一大刹に、數字の庾辭あり、一大無二人無三王無四罪無五吾

口六交無七切無八刀無九丸十無千これも亦文理ありとあり、

これに就きて、又思ひ得たることあり、東都魚問屋などの隠語に、九錢九圓等、九字のつく場合に、丸點無しといひ十の場合に、千點無し、四の場合に、横目ヨコメなどいふことを聞き及べり、これらは、右の市語より脱化せるものなり、さるにても、普通行商人等の一をソク、二をフリ、三をキリ、四をダリ、五をガレン、六をヤンジ、七をサイナン、八バンドウ、九をガケ、一緡ヒナギを一萬石、二緡五十錢を奴、

などいへるは、如何なる意より名付けたるか、或人に聞きつれば、八をバンドウといへるは、坂東八ヶ國にいでたるなりといへり、かゝる意より、皆名付くるものか、當時車夫馬丁など、又金錢上の隠語を用うとか聞けり、この他にも、劇場花柳の巷などには、この隠語最も多く行はると聞けり、昔芳原松原屋にて、瀬川といへる花魁が源氏の諸帖によりて、隠語を作れるが如きは、世の人の知る所なり、かゝることは、洞房語園などに多く載せたれば、今は悉く省けり、

以上隱語の如き、微細なるものにはあれど、此等のものは、動もすれば、普通語とすることありて、今日の普通の語にも、かゝる隱語より馴用し來れるものあるべし、必竟言語學者としては、研究の價值あるもの故、方言と合せて、茲に一斑を畧記するとはなしぬ、この他謎語といへるもの、符合として、工商家などに用うるものなどありて、大に言語上關係するものもあれど、これ亦畧せり、他日機を得て言はん。